

地方交付税法等の一部を改正する法律案要綱

第一 地方交付税法及び特別会計に関する法律の一部改正

一 地方財政の状況等に鑑み、令和二年度分の地方交付税の総額を確保するため、総額の特例として二兆六千三百三十九億三千七百万円を加算すること。

二 一の加算額のうち、一兆七千六百八十八億千八百五十万円に相当する額について、令和九年度から令和二十五年までの各年度における地方交付税の総額から九百八十二億六千七百六十九万四千円を、令和二十六年における地方交付税の総額から九百八十二億六千七百七十万二千円をそれぞれ減額すること。

三 令和三年度分の地方交付税の総額を確保するため、令和二年度に行うこととしていた交付税及び譲与税配付金特別会計の借入金償還予定額五千億円について、国の加算により償還財源が確保されている二千五百億円を控除した額を繰り延べるとともに、繰り延べにより増加する地方交付税の額二千五百億円を、令和三年度分の地方交付税の総額に加算すること。

第二 地方財政法の一部改正

令和二年度に限り、新型コロナウイルス感染症の影響に伴う地方消費税等の地方税等の減収により、地方財政法第五条の地方債を起こしてもなお適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に不足を生ずると認められる場合には、同条の規定にかかわらず、地方債を起こすことができるものとする。

地方交付税法等の一部を改正する法律

(地方交付税法の一部改正)

第一条 地方交付税法（昭和二十五年法律第二百十一号）の一部を次のように改正する。

附則第四条中「第三号」を「第五号」に、「第四号から第六号まで」を「第六号から第九号まで」に改め、第六号を第九号とし、第五号を第七号とし、同号の次に次の一号を加える。

八 第五号に掲げる額から地方交付税法等の一部を改正する法律（令和三年法律第 号）第一条の

規定による改正前の地方交付税法附則第四条第三号に掲げる額を控除した額に相当する額 二千五百

億円

附則第四条第四号を同条第六号とし、同条第三号中「三十兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円」を

「三十兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円」に改め、同号を同条第五号とし、同条第二号の次に次の二号を加える。

三 令和二年度における交付税の総額を確保するため前二号に掲げる額の合算額に加算する必要がある額のうち臨時財政対策のための特例加算額 八千六百五十一億千八百五十万円

四 令和二年度における交付税の総額を確保するため第一号及び第二号に掲げる額の合算額に加算する必要がある額のうち前号に掲げる額以外の額 一兆七千六百八十八億千八百五十万円

附則第四条の二第六項を同条第七項とし、同条第五項を同条第六項とし、同条第四項中「額及び」を「額、」に、「額を」を「額及び前条第四号に掲げる額に相当する額を」に、「令和十二年度までの間」を「令和二十六年度までの間」に、「千六百三十三億四千五十八万二千元」を「二千六百十六億八百二十七万六千元を、令和十三年度及び令和十四年度にあつては同項の規定による額から九百八十二億六千七百六十九万四千元を、令和十五年度から令和二十五年度までの各年度にあつては第二項の規定による額から九百八十二億六千七百六十九万四千元を、令和二十六年度にあつては同項の規定による額から九百八十二億六千七百七十万二千元」に改め、同項を同条第五項とし、同条第三項中「前項」を「令和三年度にあつては第二項の規定による額に同年度において前項の規定により加算される額及び次の表の上欄に掲げる同年度に應ずる同表の下欄に定める金額を加算した額とし、令和四年度から令和十四年度までの各年度にあつては第二項」に、「次の表」を「同表」に改め、同項を同条第四項とし、同条第二項の次に次の一項を加える。

3 令和三年度分の交付税の総額は、前項の規定による額に前条第八号に掲げる額を加算した額とする。

附則第四条の三第一項中「前条第四項」を「前条第五項」に改める。

(特別会計に関する法律の一部改正)

第二条 特別会計に関する法律（平成十九年法律第二十三号）の一部を次のように改正する。

附則第四条第一項中「三十兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円」を「三十兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円」に、「二十七兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円」を「二十七兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円」に改める。

附則第九条第一項中「附則第四条第二号」の下に「から第四号まで」を加え、「同条第六号」を「同条第九号」に改め、同条第三項中「令和十四年度まで」を「令和二十六年まで」に、「とする」を「から第五号に掲げる額を減額した額とし、令和十五年度から令和二十五年度までの各年度にあつては同項の規定により算定した額から同号に掲げる額を減額した額とし、令和二十六年にあつては同項の規定により算定した額から第六号に掲げる額を減額した額とする」に改め、同項第二号及び第三号中「附則第四条の二第四項」を「附則第四条の二第五項」に改め、同項第四号中「附則第四条の二第四項」を「附則第四条

の二第五項」に、「千六百三十三億四千五十八万二千元」を「二千六百十六億八百二十七万六千元」に改め、同項に次の二号を加える。

五 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和十三年度から令和二十五年度までの各年度分の交付税の総額から減額する金額 九百八十二億六千七百六十九万四千元

六 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和二十六年度分の交付税の総額から減額する金額 九百八十二億六千七百七十万二千元

(地方財政法の一部改正)

第三条 地方財政法(昭和二十三年法律第百九号)の一部を次のように改正する。

第三十三条の四第一項中「及び第三十三条の五の九」を「、第三十三条の五の九及び第三十三条の五の十三」に改める。

第三十三条の五の十二の次に次の一条を加える。

(令和二年度における地方消費税等の減収に伴う地方債の特例)

第三十三条の五の十三 地方公共団体は、令和二年度に限り、都道府県にあつては地方消費税、不動産取

得税、道府県たばこ税、ゴルフ場利用税、軽油引取税、地方税法第四百八十五条の十三第一項の規定により都道府県に対し交付するものとされる市町村たばこ税に係る交付金、地方揮発油譲与税及び航空機燃料譲与税の減収により、市町村にあつては市町村たばこ税、地方消費税交付金、同法第百三条の規定によりゴルフ場所在の市町村に対し交付するものとされるゴルフ場利用税に係る交付金、同法第百四十四条の六十第一項の規定により道路法（昭和二十七年法律第百八十号）第七条第三項に規定する指定市に対し交付するものとされる軽油引取税に係る交付金、地方揮発油譲与税及び航空機燃料譲与税の減収により、第五条ただし書の規定により地方債を起こしても、なお適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に不足を生ずると認められる場合には、その不足額に充てるため、同条の規定にかかわらず、当該不足を生ずると認められる額として総務省令で定めるところにより算定した額の範囲内で、地方債を起こすことができる。

附 則

この法律は、公布の日から施行する。

理由

地方財政の状況等に鑑み、令和二年度における地方交付税の総額を確保するため所要の加算措置を講ずるとともに、同年度における交付税及び譲与税配付金特別会計の借入金を増額するほか、同年度に限り、地方税の減収によって適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に不足が生ずると認められる場合に地方債を起すことができることとする必要がある。これが、この法律案を提出する理由である。

地方交付税法等の一部を改正する法律案 新旧対照条文

目次

| | | |
|---|---------------------------------|----|
| 一 | 地方交付税法（昭和二十五年法律第二百十一号）（第一条関係） | 1 |
| 二 | 特別会計に関する法律（平成十九年法律第二十三号）（第二条関係） | 7 |
| 三 | 地方財政法（昭和二十三年法律第九号）（第三条関係） | 11 |

地方交付税法等の一部を改正する法律案新旧対照条文

地方交付税法（昭和二十五年法律第二百一十一号）の一部改正（第一条関係）

（傍線部は改正部分）

| 改正案 | 現行 |
|---|--|
| <p>附則</p> <p>（令和二年度分の交付税の総額の特例）</p> <p>第四条 令和二年度に限り、同年度分として交付すべき交付税の総額は、第一号から第五号までに掲げる額の合算額に三千五百億円を加算した額から第六号から第九号までに掲げる額の合算額を減額した額に東日本大震災に係る災害復旧事業、復興事業その他の事業の実施のため特別の財政需要があること及び東日本大震災のため財政収入の減少があることを考慮して地方団体に対して交付する特別交付税（附則第十三条第一項並びに第十五条第一項及び第二項において「震災復興特別交付税」という。）に充てるための三千四百二十三億四千九百一十二千円を加算した額とする。</p> <p>一 第六条第二項の規定により算定した額</p> <p>二 地方交付税法等の一部を改正する法律（令和二年法律第六号）第一条の規定による改正前の地方交付税法（以下「旧法」という。）附則第四条の二第一項及び第三項の規定において令和二年度分の交付税の総額に加算することとされていた額 二千六百八十七億円</p> <p>三 令和二年度における交付税の総額を確保するため前二号に掲げる額の</p> | <p>附則</p> <p>（令和二年度分の交付税の総額の特例）</p> <p>第四条 令和二年度に限り、同年度分として交付すべき交付税の総額は、第一号から第三号までに掲げる額の合算額に三千五百億円を加算した額から第四号から第六号までに掲げる額の合算額を減額した額に東日本大震災に係る災害復旧事業、復興事業その他の事業の実施のため特別の財政需要があること及び東日本大震災のため財政収入の減少があることを考慮して地方団体に対して交付する特別交付税（附則第十三条第一項並びに第十五条第一項及び第二項において「震災復興特別交付税」という。）に充てるための三千四百二十三億四千九百一十二千円を加算した額とする。</p> <p>一 第六条第二項の規定により算定した額</p> <p>二 地方交付税法等の一部を改正する法律（令和二年法律第六号）第一条の規定による改正前の地方交付税法（以下「旧法」という。）附則第四条の二第一項及び第三項の規定において令和二年度分の交付税の総額に加算することとされていた額 二千六百八十七億円</p> |

合算額に加算する必要がある額のうち臨時財政対策のための特例加算額
八千六百五十一億千八百五十万円

四| 令和二年度における交付税の総額を確保するため第一号及び第二号に掲げる額の合算額に加算する必要がある額のうち前号に掲げる額以外の額
一兆七千六百八十八億千八百五十万円

五| 令和二年度における借入金額の額に相当する額
三十兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円

六| 令和元年度における借入金額の額に相当する額
三十一兆二千二百二十二億九千五百四十万八千円

七| 令和二年度における特別会計に関する法律（平成十九年法律第二十三号）第十五条第一項の規定による交付税及び譲与税配付金特別会計の一時借入金に係る利子及び同法附則第四条第一項の規定による借入金に係る利子の支払に充てるため必要な額
七百七十一億円

八| 第五号に掲げる額から地方交付税法等の一部を改正する法律（令和三年法律第 号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第三号に掲げる額を控除した額に相当する額
二千五百億円

九| 旧法附則第四条の二第四項の規定において令和二年度分の交付税の総額から減額することとされていた額
二千三百五十四億八千四百四十万円

（令和三年度以降の各年度分の交付税の総額の特例等）

第四条の二 略

2

三| 令和二年度における借入金額の額に相当する額
三十兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円

四| 令和元年度における借入金額の額に相当する額
三十一兆二千二百二十二億九千五百四十万八千円

五| 令和二年度における特別会計に関する法律（平成十九年法律第二十三号）第十五条第一項の規定による交付税及び譲与税配付金特別会計の一時借入金に係る利子及び同法附則第四条第一項の規定による借入金に係る利子の支払に充てるため必要な額
七百七十一億円

六| 旧法附則第四条の二第四項の規定において令和二年度分の交付税の総額から減額することとされていた額
二千三百五十四億八千四百四十万円

（令和三年度以降の各年度分の交付税の総額の特例等）

第四条の二 令和三年度以降の各年度分の交付税の総額は、当分の間、第六条第二項の規定により算定した額に百五十四億円を加算した額とする。

2 令和三年度から令和三十四年度までの各年度に限り、当該各年度分とし

3 | 令和三年度分の交付税の総額は、前項の規定による額に前条第八号に掲げる額を加算した額とする。

4 | 令和三年度から令和十四年度までの各年度分の交付税の総額は、令和三年度にあつては第二項の規定による額に同年度において前項の規定により加算される額及び次の表の上欄に掲げる同年度に应ずる同表の下欄に定める金額を加算した額とし、令和四年度から令和十四年度までの各年度にあつては第二項の規定による額に同表の上欄に掲げる当該各年度に应ずる同表の下欄に定める金額を加算した額とする。

| 年 度 | 金 額 |
|-------|----------|
| 令和三年度 | 二千九十二億円 |
| 令和四年度 | 千六百五十六億円 |
| 令和五年度 | 千二百十七億円 |
| 令和六年度 | 八百三十四億円 |
| 令和七年度 | 七百七十五億円 |

て交付すべき交付税の総額は、前項の規定による額に第一号に掲げる額を加算した額から第二号及び第三号に掲げる額の合算額を減額した額とする。

- 一 当該各年度における借入金に相当する額
- 二 当該各年度の前年度における借入金に相当する額
- 三 当該各年度における特別会計に関する法律第十五条第一項の規定による交付税及び譲与税配付金特別会計の一時借入金に係る利子及び同法附則第四条第一項の規定による借入金に係る利子の支払に充てるため必要な額

3 | 令和三年度から令和十四年度までの各年度分の交付税の総額は、前項

の規定による額に次の表の上欄に掲げる当該各年度に应ずる同表の下欄に定める金額を加算した額とする。

| 年 度 | 金 額 |
|-------|----------|
| 令和三年度 | 二千九十二億円 |
| 令和四年度 | 千六百五十六億円 |
| 令和五年度 | 千二百十七億円 |
| 令和六年度 | 八百三十四億円 |
| 令和七年度 | 七百七十五億円 |

| | |
|--------|---------|
| 令和八年度 | 五百三十五億円 |
| 令和九年度 | 百三十四億円 |
| 令和十年度 | 四十一億円 |
| 令和十一年度 | 十四億円 |
| 令和十二年度 | 七億円 |
| 令和十三年度 | 三億円 |
| 令和十四年度 | 三億円 |

5 | 地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十一年法律第十号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第一項第六号に掲げる額に相当する額、地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十二年法律第五号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第一項第五号に掲げる額に相当する額、地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十九年法律第三号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第四号に掲げる額に相当する額、旧法附則第四条第三号に掲げる額に相当する額及び前条第四号に掲げる額に相当する額を令和三年度から令和二十六年までの間に交付税の総額から減額するため、当該各年度における交付税の総額は、令和三年度にあつては前項の規定による額から三千四億四千二百四十八万二千円を、令和四年度から令和八年度までの各年度にあつては同項の規定による額から二千四百六十億七千七百八万二千円を、令和九年度から令和十二年度までの各年度にあつては同項の規定による額から二千六百十六億八百二十七万六千円を、令和十三年度及び令和十四年度にあつては同項の規定による額から九百八十二億六千七百六十九万四千円を、令和十五年度から令和二十五年度までの各年度にあつては第二項の

| | |
|--------|---------|
| 令和八年度 | 五百三十五億円 |
| 令和九年度 | 百三十四億円 |
| 令和十年度 | 四十一億円 |
| 令和十一年度 | 十四億円 |
| 令和十二年度 | 七億円 |
| 令和十三年度 | 三億円 |
| 令和十四年度 | 三億円 |

4 | 地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十一年法律第十号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第一項第六号に掲げる額に相当する額、地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十二年法律第五号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第一項第五号に掲げる額に相当する額、地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十九年法律第三号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第四号に掲げる額に相当する額及び旧法附則第四条第三号に掲げる額に相当する額を令和三年度から令和十二年までの間に交付税の総額から減額するため、当該各年度における交付税の総額は、令和三年度にあつては前項の規定による額から三千四億四千二百四十八万二千円を、令和四年度から令和八年度までの各年度にあつては同項の規定による額から二千四百六十億七千七百八万二千円を、令和九年度から令和十二年度までの各年度にあつては同項の規定による額から千六百三十三億四千五十八万二千円

規定による額から九百八十二億六千七百六十九万四千円を、令和二十六年
度にあつては同項の規定による額から九百八十二億六千七百七十万二千円
をそれぞれ減額した額とする。

6 | 略

7 | 略

(令和三年度及び令和四年度における臨時財政対策のための特例加算)

第四条の三 令和三年度及び令和四年度において、地方財政の状況等に鑑み
、交付税の総額の確保を図る必要があるときは、当該各年度分の交付
税の総額については、前条第五項の規定による額に、一般会計から交付税
及び譲与税配付金特別会計に繰り入れることが必要なものとして、臨時財
政対策のための特例加算額を加算するものとする。

2 | 略

をそれぞれ減額した額とする。

5 | 令和四年度から令和八年度までの各年度分として交付すべき交付税の総
額に係る第六条第二項の規定による額の算定については、同項に規定する
当該年度の前年度以前の年度において交付すべきであった額を超えて交付
された額のうち、平成二十八年度において交付すべきであった額を超えて
交付された額である二千二百四十五億八千六百万円について、令和四年度
から令和八年度までの各年度における同項に規定する合算額から四百四十
九億百七十二万円をそれぞれ減額する。

6 | 第二項第一号及び第二号の借入金の額は、特別会計に関する法律附則第
四条第一項の規定による借入金の額としてそれぞれ当該各年度及び当該各
年度の前年度の予算で定める額とする。

(令和三年度及び令和四年度における臨時財政対策のための特例加算)

第四条の三 令和三年度及び令和四年度において、地方財政の状況等に鑑み
、交付税の総額の確保を図る必要があるときは、当該各年度分の交付
税の総額については、前条第四項の規定による額に、一般会計から交付税
及び譲与税配付金特別会計に繰り入れることが必要なものとして、臨時財
政対策のための特例加算額を加算するものとする。

2 | 前項の臨時財政対策のための特例加算額は、地方財政法第三十三条の五
の二第一項に規定する地方債(第一号において「臨時財政対策債」とい
う。)で令和三年度及び令和四年度において総務大臣又は都道府県知事が
発行について同意又は許可をするもの(発行について同法第五条の三第六

項の規定による届出がされるものうち、同条第一項の規定による協議を受けたならば同意をすることとなると認められるものを含む。)の予定額の総額から次に掲げる額の合算額を控除した額に相当する額として法律で定めるものとする。

一 第十二条第三項の表第四十八号(1)から(8)までに規定する地方債及び臨時財政対策債に係る当該各年度における元利償還金の支払に充てるため必要な額の総額の見込額

二 その他総務大臣及び財務大臣が協議して定める額

改正案

附則

（交付税特別会計における借入金の特例）

第四条 交付税特別会計において、令和二年度から令和三十三年度までの各年度において、地方交付税交付金を支弁するために必要がある場合には、第十三条第一項の規定にかかわらず、令和二年度にあつては三十兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円を、令和三年度から令和六年度までの各年度にあつては三十兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円から次の表の上欄に掲げる当該年度までの各年度に應ずる同表の下欄に定める額を順次控除して得た金額を、令和七年度から令和三十三年度までの各年度にあつては二十七兆九千六百二十二億九千五百四十万八千円から毎年度一兆円を順次控除して得た金額を限り、予算で定めるところにより、交付税特別会計の負担において、借入金をすることができる。

| 年 度 | 控 除 額 |
|-------|-------|
| 令和三年度 | 六千億円 |
| 令和四年度 | 七千億円 |
| 令和五年度 | 八千億円 |
| 令和六年度 | 九千億円 |

2・3 略

現 行

附則

（交付税特別会計における借入金の特例）

第四条 交付税特別会計において、令和二年度から令和三十三年度までの各年度において、地方交付税交付金を支弁するために必要がある場合には、第十三条第一項の規定にかかわらず、令和二年度にあつては三十兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円を、令和三年度から令和六年度までの各年度にあつては三十兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円 から次の表の上欄に掲げる当該年度までの各年度に應ずる同表の下欄に定める額を順次控除して得た金額を、令和七年度から令和三十三年度までの各年度にあつては二十七兆七千二百二十二億九千五百四十万八千円 から毎年度一兆円を順次控除して得た金額を限り、予算で定めるところにより、交付税特別会計の負担において、借入金をすることができる。

| 年 度 | 控 除 額 |
|-------|-------|
| 令和三年度 | 六千億円 |
| 令和四年度 | 七千億円 |
| 令和五年度 | 八千億円 |
| 令和六年度 | 九千億円 |

2 前項の規定による借入金は、一年内に償還しなければならない。

(交付税特別会計における一般会計からの繰入金の額の特例)

第九条 令和二年度における第二十四条の規定による一般会計からの繰入金
の額は、同条の規定により算定した額に地方交付税法附則第四条第二号か
ら第四号までに掲げる額を加算した額に二千五百億円を加算した額から同
条第九号に掲げる額を減額した額とする。

2 略

3 令和三年度から令和二十六年まで各年度における第二十四条の規定
による一般会計からの繰入金額は、令和三年度にあつては前項の規定に
より算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から第二号に掲げる額を
減額した額とし、令和四年度から令和八年度までの各年度にあつては同項
の規定により算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から第三号に掲
げる額を減額した額とし、令和九年度から令和十二年度までの各年度にあ
つては同項の規定により算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から
第四号に掲げる額を減額した額とし、令和十三年度及び令和十四年度にあ
つては同項の規定により算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から
第五号に掲げる額を減額した額とし、令和十五年度から令和二十五年ま
での各年度にあつては同項の規定により算定した額から同号に掲げる額を
減額した額とし、令和二十六年にあつては同項の規定により算定した額

3 第一項の規定による借入金の利子の支払に充てるために必要がある場合
には、第六条の規定にかかわらず、予算で定める金額を限り、一般会計か
ら交付税特別会計に繰り入れることができる。

(交付税特別会計における一般会計からの繰入金の特例)

第九条 令和二年度における第二十四条の規定による一般会計からの繰入金
の額は、同条の規定により算定した額に地方交付税法附則第四条第二号
に掲げる額を加算した額に二千五百億円を加算した額から同
条第六号に掲げる額を減額した額とする。

2 令和三年度以降の各年度における第二十四条の規定による一般会計から
の繰入金額は、当分の間、同条の規定により算定した額に百五十四億円
を加算した額とする。

3 令和三年度から令和十四年度まで各年度における第二十四条の規定
による一般会計からの繰入金額は、令和三年度にあつては前項の規定に
より算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から第二号に掲げる額を
減額した額とし、令和四年度から令和八年度までの各年度にあつては同項
の規定により算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から第三号に掲
げる額を減額した額とし、令和九年度から令和十二年度までの各年度にあ
つては同項の規定により算定した額に第一号に掲げる額を加算した額から
第四号に掲げる額を減額した額とし、令和十三年度及び令和十四年度にあ
つては同項の規定により算定した額に第一号に掲げる額を加算した額とす
る

から第六号に掲げる額を減額した額とする。

一 次の表の上欄に掲げる当該各年度に应ずる同表の下欄に定める金額

| 年 度 | 金 額 |
|--------|----------|
| 令和三年度 | 二千九十二億円 |
| 令和四年度 | 千六百五十六億円 |
| 令和五年度 | 千二百十七億円 |
| 令和六年度 | 八百三十四億円 |
| 令和七年度 | 七百七十五億円 |
| 令和八年度 | 五百三十五億円 |
| 令和九年度 | 百三十四億円 |
| 令和十年度 | 四十一億円 |
| 令和十一年度 | 十四億円 |
| 令和十二年度 | 七億円 |
| 令和十三年度 | 三億円 |
| 令和十四年度 | 三億円 |

二 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和三年度分の交付税の総額から減額する金額 三千四億四千二百四十八万二千円

三 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和四年度から令和八年度までの各年度分の交付税の総額から減額する金額 二千四百六十億七千七百八万二千円

四 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和九年度から令和十二年度までの各年度分の交付税の総額から減額する金額 二千六百十六億八百二十七万六千円

一 次の表の上欄に掲げる当該各年度に应ずる同表の下欄に定める金額

| 年 度 | 金 額 |
|--------|----------|
| 令和三年度 | 二千九十二億円 |
| 令和四年度 | 千六百五十六億円 |
| 令和五年度 | 千二百十七億円 |
| 令和六年度 | 八百三十四億円 |
| 令和七年度 | 七百七十五億円 |
| 令和八年度 | 五百三十五億円 |
| 令和九年度 | 百三十四億円 |
| 令和十年度 | 四十一億円 |
| 令和十一年度 | 十四億円 |
| 令和十二年度 | 七億円 |
| 令和十三年度 | 三億円 |
| 令和十四年度 | 三億円 |

二 地方交付税法附則第四条の二第四項の規定により令和三年度分の交付税の総額から減額する金額 三千四億四千二百四十八万二千円

三 地方交付税法附則第四条の二第四項の規定により令和四年度から令和八年度までの各年度分の交付税の総額から減額する金額 二千四百六十億七千七百八万二千円

四 地方交付税法附則第四条の二第四項の規定により令和九年度から令和十二年度までの各年度分の交付税の総額から減額する金額 千六百三十三億四千五十八万二千円

五 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和十三年度から令和二十五年までの各年度分の交付税の総額から減額する金額 九百八十二億六千七百六十九万四千円

六 地方交付税法附則第四条の二第五項の規定により令和二十六年度分の交付税の総額から減額する金額 九百八十二億六千七百七十万二千円

| 改正案 | 現行 |
|---|---|
| <p>附則</p> <p>（平成九年度における地方債の特例）</p> <p>第三十三条の四 地方公共団体は、平成九年度に限り、当該地方公共団体の同年度の地方消費税又は地方消費税交付金（地方税法第七十二条の百十五の規定により市町村に対し交付するものとされる地方消費税に係る交付金をいう。以下この条、第三十三条の五の九及び第三十三条の五の十三において同じ。）の収入見込額及び消費譲与税相当額（地方税法等改正法附則第十四条第一項の規定により同年度に譲与される廃止前の消費譲与税に相当する額をいう。以下この条において同じ。）の収入見込額の合算額が当該地方公共団体の平成十年度以降の各年度の地方消費税又は地方消費税交付金の収入見込額に比して過少であることにより財政の安定が損なわれることのないよう、適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に充てるため、第五条の規定にかかわらず、地方債を起すことができる。</p> <p>2 略</p> <p>（地方税法附則第五十九条第一項の規定による徴収の猶予等に伴う地方債の特例）</p> <p>第三十三条の五の十二 略</p> <p>（令和二年度における地方消費税等の減収に伴う地方債の特例）</p> | <p>附則</p> <p>（平成九年度における地方債の特例）</p> <p>第三十三条の四 地方公共団体は、平成九年度に限り、当該地方公共団体の同年度の地方消費税又は地方消費税交付金（地方税法第七十二条の百十五の規定により市町村に対し交付するものとされる地方消費税に係る交付金をいう。以下この条及び第三十三条の五の九において同じ。）の収入見込額及び消費譲与税相当額（地方税法等改正法附則第十四条第一項の規定により同年度に譲与される廃止前の消費譲与税に相当する額をいう。以下この条において同じ。）の収入見込額の合算額が当該地方公共団体の平成十年度以降の各年度の地方消費税又は地方消費税交付金の収入見込額に比して過少であることにより財政の安定が損なわれることのないよう、適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に充てるため、第五条の規定にかかわらず、地方債を起すことができる。</p> <p>2 略</p> <p>（地方税法附則第五十九条第一項の規定による徴収の猶予等に伴う地方債の特例）</p> <p>第三十三条の五の十二 略</p> |

第三十三條の五の十三 地方公共団体は、令和二年度に限り、都道府県にあ

つては地方消費税、不動産取得税、道府県たばこ税、ゴルフ場利用税、軽油引取税、地方税法第四百八十五条の十三第一項の規定により都道府県に
対し交付するものとされる市町村たばこ税に係る交付金、地方揮発油譲与
税及び航空機燃料譲与税の減収により、市町村にあつては市町村たばこ税
、地方消費税交付金、同法第百三条の規定によりゴルフ場所在の市町村に
対し交付するものとされるゴルフ場利用税に係る交付金、同法第百四十四
条の六十第一項の規定により道路法（昭和二十七年法律第百八十号）第七
条第三項に規定する指定市に対し交付するものとされる軽油引取税に係る
交付金、地方揮発油譲与税及び航空機燃料譲与税の減収により、第五条た
だし書の規定により地方債を起こしても、なお適正な財政運営を行うにつ
き必要とされる財源に不足を生ずると認められる場合には、その不足額に
充てるため、同条の規定にかかわらず、当該不足を生ずると認められる額
として総務省令で定めるところにより算定した額の範囲内で、地方債を起
こすことができる。

地方交付税法等の一部を改正する法律案参照条文

目次

| | | |
|---|--|----|
| 一 | 地方交付税法（昭和二十五年法律第二百十一号）（抄） | 1 |
| 二 | 地方交付税法等の一部を改正する法律（令和二年法律第六号）による改正前の地方交付税法 （昭和二十五年法律第二百十一号）（抄） | 9 |
| 三 | 特別会計に関する法律（平成十九年法律第二十三号）（抄） | 10 |
| 四 | 地方財政法（昭和二十三年法律第九号）（抄） | 13 |
| 五 | 地方税法（昭和二十五年法律第二百二十六号）（抄） | 15 |
| 六 | 道路法（昭和二十七年法律第八十号）（抄） | 20 |
| 七 | 地方揮発油譲与税法（昭和三十年法律第一百三十三号）（抄） | 21 |
| 八 | 航空機燃料譲与税法（昭和四十七年法律第十三号）（抄） | 21 |

○ 地方交付税法（昭和二十五年法律第二百一十号）（抄）

（交付税の総額）

第六条 所得税及び法人税の収入額のそれぞれ百分の三十三・一、酒税の収入額の百分の五十、消費税の収入額の百分の十九・五並びに地方法人税の収入額をもつて交付税とする。

2 毎年度分として交付すべき交付税の総額は、当該年度における所得税及び法人税の収入見込額のそれぞれ百分の三十三・一、酒税の収入見込額の百分の五十、消費税の収入見込額の百分の十九・五並びに地方法人税の収入見込額に相当する額の合算額に当該年度の前年度以前の年度における交付税で、まだ交付していない額を加算し、又は当該前年度以前の年度において交付すべきであつた額を超えて交付した額を当該合算額から減額した額とする。

（基準財政収入額の算定方法）

第十四条 基準財政収入額は、道府県にあつては基準税率をもつて算定した当該道府県の普通税（法定外普通税を除く。）の収入見込額（利子割の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の利子割の収入見込額から利子割交付金の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とし、配当割の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の配当割の収入見込額から地方税法第七十一条の四十七の規定により市町村に対し交付するものとされる配当割に係る交付金（以下この項及び第三項において「配当割交付金」という。）の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とし、株式等譲渡所得割の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の株式等譲渡所得割の収入見込額から同法第七十一条の六十七の規定により市町村に対し交付するものとされる株式等譲渡所得割に係る交付金（以下この項及び第三項において「株式等譲渡所得割交付金」という。）の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とし、法人の行う事業に対する事業税の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の法人の行う事業に対する事業税の収入見込額から当該収入見込額を基礎として同法第七十二条の七十六の規定の例により算定した同条の規定により市町村に対し交付するものとされる法人の行う事業に対する事業税に係る交付金（以下「法人事業税交付金」という。）の交付見込額を控除した額とし、地方消費税の収

入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の地方消費税の収入見込額から同法第七十二条の百十五の規定により市町村に対し交付するものとされる地方消費税に係る交付金（以下この項及び第三項において「地方消費税交付金」という。）の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とし、ゴルフ場利用税の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県のゴルフ場利用税の収入見込額から同法第百三条の規定によりゴルフ場所在の市町村に対し交付するものとされるゴルフ場利用税に係る交付金（以下この項及び第三項において「ゴルフ場利用税交付金」という。）の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とし、道路法第七条第三項の市（以下この項において「指定市」という。）を包括する道府県の軽油引取税の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の軽油引取税の収入見込額から地方税法第百四十四条の六十第一項の規定により指定市に対し交付するものとされる軽油引取税に係る交付金（以下この項及び第三項において「軽油引取税交付金」という。）の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とし、環境性能割の収入見込額については基準税率をもつて算定した当該道府県の環境性能割の収入見込額から同法第百七十七条の六の規定により市町村に対し交付するものとされる環境性能割に係る交付金（以下この項及び第三項において「環境性能割交付金」という。）の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とする。）の交付見込額から同法第百八十五条の十三の規定により道府県に対し交付するものとされる市町村たばこ税に係る交付金（以下この項及び第三項において「市町村たばこ税都道府県交付金」という。）の収入見込額の百分の七十五の額、当該道府県の特別法人事業譲与税の収入見込額の百分の七十五の額、当該道府県の地方揮発油譲与税、石油ガス譲与税、自動車重量譲与税、航空機燃料譲与税及び森林環境譲与税の収入見込額並びに基準率をもつて算定した当該道府県の国有資産等所在市町村交付金法（昭和三十一年法律第八十二号）第十四条第一項の国有資産等所在都道府県交付金（次項及び第三項において「都道府県交付金」という。）の収入見込額の合算額、市町村にあつては基準税率をもつて算定した当該市町村の普通税（法定外普通税を除く。）及び事業所税の収入見込額（市町村たばこ税の収入見込額については、基準税率をもつて算定した当該市町村の市町村たばこ税の収入見込額から市町村たばこ税都道府県交付金の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とする。）の交付見込額の百分の七十五の額、当該市町村の配当割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該市町村の株式等譲渡所得割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、基準税率をもつて算定した当該市町村を包括する道府県の法人の行う事業に対する事業税の収入見込額を基礎として地方税法第七十二条の七十六の規定

の例により算定した当該市町村の法人事業税交付金の収入見込額、当該市町村の地方消費税交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該市町村のゴルフ場利用税交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該市町村の環境性能割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該市町村の地方揮発油譲与税、特別とん譲与税、自動車重量譲与税、航空機燃料譲与税及び森林環境譲与税の収入見込額並びに基準率をもつて算定した国有資産等所在市町村交付金法第二条第一項の国有資産等所在市町村交付金（以下この条において「市町村交付金」という。）の収入見込額の合算額（指定市については、基準税率をもつて算定した当該指定市の普通税（法定外普通税を除く。）及び事業所税の収入見込額（市町村たばこ税の収入見込額については、基準税率をもつて算定した当該指定市の市町村たばこ税の収入見込額から市町村たばこ税都道府県交付金の交付見込額の百分の七十五に相当する額を控除した額とする。）、当該指定市の利子割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該指定市の配当割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該指定市の株式等譲渡所得割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、基準税率をもつて算定した当該指定市を包括する道府県の法人の行う事業に対する事業税の収入見込額を基礎として地方税法第七十二条の七十六の規定の例により算定した当該指定市の法人事業税交付金の収入見込額、当該指定市の地方消費税交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該指定市のゴルフ場利用税交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該指定市の軽油引取税交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該指定市の環境性能割交付金の収入見込額の百分の七十五の額、当該指定市の地方揮発油譲与税、特別とん譲与税、石油ガス譲与税、自動車重量譲与税、航空機燃料譲与税及び森林環境譲与税の収入見込額並びに基準率をもつて算定した当該指定市の市町村交付金の収入見込額の合算額）とする。

2 前項の基準税率は、地方税法第一条第一項第五号に規定する標準税率（標準税率の定めのない地方税については、同法に定める税率とする。）の道府県税にあつては百分の七十五に相当する率（同法第七十二条の二十四の四に規定する課税標準により課する事業税については、当該道府県が同法第七十二条の二十四の七第九項の規定により定める税率を基礎として総務省令で定める率の百分の七十五に相当する率とする。）、市町村税にあつては百分の七十五に相当する率とし、前項の基準率は、都道府県交付金にあつては国有資産等所在市町村交付金法第三条第一項に規定する率の百分の七十五に相当する率、市町村交付金にあつては同項に規定する率の百分の七十五に相当する率とする。

3 第一項の基準財政収入額は、次の表の上欄に掲げる地方団体につき、それぞれ同表の中欄に掲げる収入の項目ごとに、当該下

欄に掲げる算定の基礎により、総務省令で定める方法により、算定するものとする。

| 地方団体の種類 | 収入の項目 | 基準税額等の算定の基礎 |
|---------|------------------|--|
| 道府県 | 道府県民税 | |
| | 1 均等割 | 前年度分の均等割の課税の基礎となつた納税義務者数 |
| | 2 所得割 | 前年度分の所得割の課税の基礎となつた納税義務者等の数及び課税標準等の額 |
| | 3 法人税割 | 当該道府県の区域内に事務所又は事業所を有する法人に係る前年度分の法人税割の課税標準等の額 |
| | 4 利子割 | 前年度の利子割の課税標準等の額 |
| | 5 配当割 | 前年度の配当割の課税標準等の額 |
| | 6 株式等譲渡所得割 | 前年度の株式等譲渡所得割の課税標準等の額 |
| | 二 事業税 | |
| | 1 個人が行う事業に対する事業税 | 前年度分の個人の事業税の課税の基礎となつた課税標準の数値及び納税義務者数 |
| | 2 法人が行う事業に対する事業税 | 当該道府県の区域内に事務所又は事業所を有する法人に係る前年度分の事業税の課税標準等の数値 |
| | 三 地方消費税 | |
| | 1 譲渡割 | 前年度の譲渡割の課税標準等の額 |
| | 2 貨物割 | 前年度の貨物割の課税標準等の額 |
| | 四 不動産取得税 | 前年度及び前々年度における不動産取得税の課税標準等の額 |
| | 五 道府県たばこ税 | 前年度の道府県たばこ税の課税標準数量 |
| | 六 ゴルフ場利用税 | 当該道府県に所在するゴルフ場の延利用人員 |

七 軽油引取税

前年度の軽油引取税に係る課税標準たる数量

八 自動車税

1 環境性能割

前年度中における当該道府県の区域内に定置場を有した自動車（地方税法第四百十五条第三号に規定する自動車をいう。以下この号において同じ。）の取得件数

2 種別割

当該道府県の区域内に定置場を有する自動車の台数

九 鉱区税

鉱業法（昭和二十五年法律第二百八十九号）第五十九条に規定する鉱業原簿に登録されている鉱区の面積（地方税法附則第十三条に規定する鉱区にあつては、当該鉱区に係る河床の延長）及び日本国と大韓民国との間の両国に隣接する大陸棚^{たな}の南部の共同開発に関する協定の実施に伴う石油及び可燃性天然ガス資源の開発に関する特別措置法（昭和五十三年法律第八十一号）第三十二条に規定する特定鉱業原簿に登録されている共同開発鉱区の面積

十 固定資産税

当該道府県の区域内における地方税法第三百四十九条の四に規定する大規模の償却資産又は同法第三百四十九条の五に規定する新設大規模償却資産で同法第七百四十条の規定により当該道府県が固定資産税を課することができるものに係る当該年度の固定資産税の課税標準となるべき額の合計額から同法第三百四十九条の四又は第三百四十九条の五の規定により市町村が課することができる固定資産税の課税標準額を控除した額

十一 市町村たばこ税都道府県交付金

当該道府県が包括する市町村の前年度の市町村たばこ税の課税標準数量等

| | | |
|----------------|--|--|
| | <p>十二 特別法人事業譲与税</p> <p>十三 地方揮発油譲与税</p> <p>十四 石油ガス譲与税</p> <p>十五 自動車重量譲与税</p> <p>十六 航空機燃料譲与税</p> <p>十七 森林環境譲与税</p> <p>十八 都道府県交付金</p> | <p>前年度の特別法人事業譲与税の譲与額</p> <p>前年度の地方揮発油譲与税の譲与額</p> <p>前年度の石油ガス譲与税の譲与額</p> <p>前年度の自動車重量譲与税の譲与額</p> <p>前年度の航空機燃料譲与税の譲与額</p> <p>前年度の森林環境譲与税の譲与額</p> <p>当該道府県の区域内における国有資産等所在市町村交付金法第五条第一項に規定する大規模の償却資産又は同法第六条第一項に規定する新設大規模償却資産で同法第十四条第一項の規定により当該道府県に都道府県交付金が交付されるべきものに係る当該年度の交付金算定標準額（同法第三条第二項に規定する交付金算定標準額をいう。以下この号において同じ。）の合計額から同法第五条又は第六条の規定により市町村に交付されるべき市町村交付金に係る当該大規模の償却資産又は新設大規模償却資産の交付金算定標準額を控除した額</p> |
| <p>市町村</p> | <p>一 市町村民税</p> <p>1 均等割</p> <p>2 所得割</p> <p>3 法人税割</p> | <p>前年度分の均等割の課税の基礎となつた納税義務者数</p> <p>前年度分の所得割の課税の基礎となつた納税義務者等の数及び課税標準等の額</p> <p>当該市町村の区域内に事務所又は事業所を有する法人に係る前年度分の法人税割の課税標準等の額</p> |
| <p>二 固定資産税</p> | | |

| | | |
|---|---------|--|
| 1 | 土地 | 当該市町村における土地の地目ごとの一平方メートル当たりの平均価格及びその地積 |
| 2 | 家屋 | 当該市町村における家屋の一平方メートル当たりの平均価格及び床面積 |
| 3 | 償却資産 | (1) 地方税法第三百八十九条の規定により総務大臣又は都道府県知事が価格を決定し、決定した価格を配分するもの 当該配分額 (2) その他の償却資産 当該市町村が課することができる固定資産税の課税標準となるべき額 |
| 三 | 軽自動車税 | 前年度中における当該市町村の区域内に定置場を有した三輪以上の地方税法第四百四十二条第五号に規定する軽自動車の取得件数 |
| 1 | 環境性能割 | 当該市町村の区域内に定置場を有する地方税法第四百四十二条第三号に規定する軽自動車等の種類別の台数 |
| 2 | 種別割 | 前年度の市町村たばこ税の課税標準数量 |
| 四 | 市町村たばこ税 | 前年度の市町村たばこ税の課税標準数量 |
| 五 | 鉱産税 | 鉱物の生産量及び山元価格 |
| 六 | 特別土地保有税 | 前年度における特別土地保有税の課税標準額 |
| 七 | 事業所税 | 前年度における事業所税の課税標準額（当該年度において新たに事業所税を課することとなる市にあつては、当該年度における事業所税の課税標準となるべき事業所床面積及び従業者給与総額） |
| 八 | 利子割交付金 | 前年度の利子割交付金の交付額 |

| | |
|---------------|--|
| 九 配当割交付金 | 前年度の配当割交付金の交付額 |
| 十 株式等譲渡所得割交付金 | 前年度の株式等譲渡所得割交付金の交付額 |
| 十一 法人事業税交付金 | 当該市町村を包括する道府県の区域内に事務所又は事業所を有する法人に係る前年度分の事業税の課税標準等の数値並びに前年度の法人事業税交付金の交付額の算定に用いた当該道府県の従業者数及び当該市町村の従業者数 |
| 十二 地方消費税交付金 | 前年度の地方消費税交付金の交付額 |
| 十三 ゴルフ場利用税交付金 | 当該市町村に所在するゴルフ場の延利用人員 |
| 十四 軽油引取税交付金 | 前年度の軽油引取税交付金の交付額 |
| 十五 環境性能割交付金 | 前年度の環境性能割交付金の交付額 |
| 十六 地方揮発油譲与税 | 前年度の地方揮発油譲与税の譲与額 |
| 十七 特別とん譲与税 | 前年度の特別とん譲与税の譲与額 |
| 十八 石油ガス譲与税 | 前年度の石油ガス譲与税の譲与額 |
| 十九 自動車重量譲与税 | 前年度の自動車重量譲与税の譲与額 |
| 二十 航空機燃料譲与税 | 前年度の航空機燃料譲与税の譲与額 |
| 二十一 森林環境譲与税 | 前年度の森林環境譲与税の譲与額 |
| 二十二 市町村交付金 | 国有資産等所在市町村交付金法第七条、第八条又は第十条第一項の規定により各省各庁の長又は地方公共団体の長が当該固定資産の所在地の市町村長に通知した固定資産の価格 |

○ 地方交付税法等の一部を改正する法律（令和二年法律第六号）による改正前の地方交付税法（昭和二十五年法律第二百一十一号）（抄）

（令和二年度以降の各年度分の交付税の総額の特例等）

第四条の二 令和二年度以降の各年度分の交付税の総額は、当分の間、第六条第二項の規定により算定した額に百五十四億円を加算した額とする。

2 令和二年度から令和三十四年度までの各年度に限り、当該各年度分として交付すべき交付税の総額は、前項の規定による額に第一号に掲げる額を加算した額から第二号及び第三号に掲げる額の合算額を減額した額とする。

一 当該各年度における借入金に相当する額

二 当該各年度の前年度における借入金に相当する額

三 当該各年度における特別会計に関する法律第十五条第一項の規定による交付税及び譲与税配付金特別会計の一時借入金に係る利子及び同法附則第四条第一項の規定による借入金に係る利子の支払に充てるため必要な額

3 令和二年度から令和十四年度までの各年度分の交付税の総額は、前項の規定による額に次の表の上欄に掲げる当該各年度に應ずる同表の下欄に定める金額を加算した額とする。

| 年 度 | 金 額 |
|-------|-----------|
| 令和二年度 | 二千五百三十三億円 |
| 令和三年度 | 二千九十二億円 |
| 令和四年度 | 千六百五十六億円 |
| 令和五年度 | 千二百十七億円 |
| 令和六年度 | 八百三十四億円 |
| 令和七年度 | 七百七十五億円 |
| 令和八年度 | 五百三十五億円 |

| | |
|--------|--------|
| 令和九年度 | 百三十四億円 |
| 令和十年度 | 四十一億円 |
| 令和十一年度 | 十四億円 |
| 令和十二年度 | 七億円 |
| 令和十三年度 | 三億円 |
| 令和十四年度 | 三億円 |

4 地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十一年法律第十号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第一項第六号に掲げる額に相当する額、地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十二年法律第五号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第一項第五号に掲げる額に相当する額、地方交付税法等の一部を改正する法律（平成二十九年法律第三号）第一条の規定による改正前の地方交付税法附則第四条第四号に掲げる額に相当する額及び前条第三号に掲げる額に相当する額を令和二年度から令和十二年度までの間に交付税の総額から減額するため、当該各年度における交付税の総額は、令和二年度にあつては前項の規定による額から二千三百五十四億八千四百四十万円を、令和三年度にあつては同項の規定による額から三千四億四千二百四十八万二千元を、令和四年度から令和八年度までの各年度にあつては同項の規定による額から二千四百六十六億七千七百八万二千元を、令和九年度から令和十二年度までの各年度にあつては同項の規定による額から千六百三十三億四千五百十八万二千元をそれぞれ減額した額とする。

5・6 略

○ 特別会計に関する法律（平成十九年法律第二十三号）（抄）

（一般会計からの繰入れ）

第六条 各特別会計において経理されている事務及び事業に係る経費のうち、一般会計からの繰入れの対象となるべき経費（以下「一般会計からの繰入対象経費」という。）が次章に定められている場合において、一般会計からの繰入対象経費の財源に充て

るために必要があるときに限り、予算で定めるところにより、一般会計から当該特別会計に繰入れをすることができる。

(借入金)

第十三条 各特別会計においては、借入金の対象となるべき経費（以下「借入金対象経費」という。）が次章に定められている場合において、借入金対象経費を支弁する必要があるときに限り、当該特別会計の負担において、借入金をすることができる。

2 略

(一時借入金等)

第十五条 各特別会計において、支払上現金に不足がある場合には、当該特別会計の負担において、一時借入金をし、融通証券を発行し、又は国庫余裕金を繰り替えて使用することができる。ただし、融通証券の発行は、次章に当該発行をすることができる旨の定めがある場合に限り、行うことができる。

2 6 略

(歳入及び歳出)

第二十三条 交付税特別会計における歳入及び歳出は、次のとおりとする。

一 歳入

イ 地方法人税の収入

ロ 一般会計からの繰入金

ハ 東日本大震災復興特別会計からの繰入金

ニ 地方揮発油税、石油ガス譲与税に充てられる石油ガス税、特別法人事業税、自動車重量譲与税に充てられる自動車重量税、航空機燃料譲与税に充てられる航空機燃料税及び特別とん税の収入

ホ 一時借入金の借換えによる収入金

へ 附属雑収入

二 歳出

イ 地方交付税交付金（地方交付税法（昭和二十五年法律第二百一十一号）による地方交付税の交付金をいう。以下同じ。）及び地方譲与税譲与金（地方揮発油譲与税法（昭和三十年法律第百十三号）による地方揮発油譲与税の譲与金、森林環境税及び森林環境譲与税に関する法律（平成三十一年法律第三号）による森林環境譲与税の譲与金（以下「森林環境譲与税譲与金」という。）、石油ガス譲与税法（昭和四十年法律第百五十七号）による石油ガス譲与税の譲与金、特別法人事業税及び特別法人事業譲与税に関する法律（平成三十一年法律第四号）による特別法人事業譲与税の譲与金、自動車重量譲与税法（昭和四十六年法律第九十号）による自動車重量譲与税の譲与金、航空機燃料譲与税法（昭和四十七年法律第十三号）による航空機燃料譲与税の譲与金及び特別とん譲与税法（昭和三十二年法律第七十七号）による特別とん譲与税の譲与金をいう。）並びにこれらに関する諸費

ロ 一時借入金の子

ハ 借り換えた一時借入金償還金及び利子

二 附属諸費

（一般会計からの繰入れの特例）

第二十四条 第六条の規定にかかわらず、毎会計年度、予算で定めるところにより、当該年度における所得税及び法人税の収入見込額のそれぞれ百分の三十三・一、酒税の収入見込額の百分の五十並びに消費税の収入見込額の百分の十九・五に相当する金額の合算額に、当該年度の前年度以前の年度における地方交付税法による地方交付税に相当する金額でまだ交付税特別会計に繰り入れていない額を加算し、又は当該合算額から当該前年度以前の年度において当該地方交付税に相当する金額を超えて交付税特別会計に繰り入れた額を控除した額に相当する金額を、一般会計から交付税特別会計に繰り入れるものとする。

○ 地方財政法（昭和二十三年法律第九号）（抄）

（地方債の制限）

第五条 地方公共団体の歳出は、地方債以外の歳入をもつて、その財源としなければならない。ただし、次に掲げる場合においては、地方債をもつてその財源とすることができる。

- 一 交通事業、ガス事業、水道事業その他地方公共団体の行う企業（以下「公営企業」という。）に要する経費の財源とする場合
- 二 出資金及び貸付金の財源とする場合（出資又は貸付けを目的として土地又は物件を買収するために要する経費の財源とする場合を含む。）
- 三 地方債の借換えのために要する経費の財源とする場合
- 四 災害応急事業費、災害復旧事業費及び災害救助事業費の財源とする場合
- 五 学校その他の文教施設、保育所その他の厚生施設、消防施設、道路、河川、港湾その他の土木施設等の公共施設又は公用施設建設の建設事業費（公共的団体又は国若しくは地方公共団体が出資している法人で政令で定めるものが設置する公共施設の建設事業に係る負担又は助成に要する経費を含む。）及び公共用若しくは公用に供する土地又はその代替地としてあらかじめ取得する土地の購入費（当該土地に関する所有権以外の権利を取得するために要する経費を含む。）の財源とする場合

（平成九年度における地方債の特例）

第三十三条の四 地方公共団体は、平成九年度に限り、当該地方公共団体の同年度の地方消費税又は地方消費税交付金（地方税法第七十二条の百十五の規定により市町村に対し交付するものとされる地方消費税に係る交付金をいう。以下この条及び第三十三条の五の九において同じ。）の収入見込額及び消費譲与税相当額（地方税法等改正法附則第十四条第一項の規定により同年度に譲与される廃止前の消費譲与税に相当する額をいう。以下この条において同じ。）の収入見込額の合算額が当該地方公共団体の平成十年度以降の各年度の地方消費税又は地方消費税交付金の収入見込額に比して過少であることにより財政の安定が損なわれ

ることのないよう、適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に充てるため、第五条の規定にかかわらず、地方債を起すことができる。

2 前項の規定により起こすことができる平成九年度の地方債の額は、都道府県にあつては当該都道府県の同年度の地方消費税の収入見込額及び消費譲与税相当額の収入見込額の合算額から地方消費税交付金の交付見込額を控除した額が当該都道府県の平成十年度以降の各年度の地方消費税の収入見込額から地方消費税交付金の交付見込額を控除した額に比して過少と認められる額として、地方税法第七十二条の百四第一項に規定する消費に相当する額を基礎として自治省令で定める方法により算定した額とし、市町村にあつては当該市町村の平成九年度の地方消費税交付金の収入見込額及び消費譲与税相当額の収入見込額の合算額が当該市町村の平成十年度以降の各年度の地方消費税交付金の収入見込額に比して過少と認められる額として、同法第七十二条の百五第一項に規定する人口及び従業者数を基礎として自治省令で定める方法により算定した額とする。

(地方税の減収に伴う地方債の特例)

第三十三条の五の三 地方公共団体は、当分の間、各年度において、都道府県にあつては道府県民税の法人税割及び利子割、法人の行う事業に対する事業税並びに特別法人事業譲与税の減収により、市町村にあつては市村民税の法人税割、地方税法第七十一条の二十六の規定により市町村に対し交付するものとされる利子割に係る交付金及び同法第七十二条の七十六又は第七百三十四条第四項の規定により市町村に対し交付するものとされる法人の行う事業に対する事業税に係る交付金(第三十三条の五の九において「法人事業税交付金」という。)の減収により、第五条ただし書の規定により地方債を起しても、なお適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に不足を生ずると認められる場合には、その不足額に充てるため、同条の規定にかかわらず、当該不足を生ずると認められる額として総務省令で定めるところにより算定した額の範囲内で、地方債を起すことができる。

(地方税法の改正に伴う地方債の特例)

第三十三条の五の九 地方公共団体は、当分の間、各年度において、社会保障の安定財源の確保等を図る税制の抜本的な改革を行うための地方税法及び地方交付税法の一部を改正する法律(平成二十四年法律第六十九号)、地方税法等の一部を改正する法律

(平成二十六年法律第四号)及び地方税法等の一部を改正する等の法律(平成二十八年法律第十三号)の施行により、都道府県にあつては道府県民税の法人税割の減収額及び法人事業税交付金の交付額の合算額が地方消費税の増収額を超える場合には、市町村にあつては市町村民税の法人税割の減収額が法人事業税交付金の収入額及び地方消費税交付金の増収額の合算額を超える場合には、これらの減収により財政の安定が損なわれることのないよう、適正な財政運営を行うにつき必要とされる財源に充てるため、第五条の規定にかかわらず、総務省令で定めるところにより算定した額の範囲内で、地方債を起すことができる。

(地方税法附則第五十九条第一項の規定による徴収の猶予等に伴う地方債の特例)

第三十三条の五の十二 地方公共団体は、令和二年度及び令和三年度に限り、地方税法附則第五十九条第一項(地方税法等の一部を改正する法律(令和二年法律第二十六号)附則第二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。)の規定による徴収の猶予をする場合及び国が新型コロナウイルス感染症等の影響に対応するための国税関係法律の臨時特例に関する法律(令和二年法律第二十五号)第三条第一項(同法附則第二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。)の規定により読み替えて適用される国税通則法(昭和三十七年法律第六十六号)第四十六条第一項の規定による納税の猶予をする場合には、地方公共団体のこれらによる減収額を埋めるため、第五条の規定にかかわらず、当該減収額を勘案して総務省令で定めるところにより算定した額の範囲内で、地方債を起すことができる。

○ 地方税法(昭和二十五年法律第二百二十六号)(抄)

(道府県民税に関する用語の意義)

第二十三条 道府県民税について、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 均等割 均等の額により課する道府県民税をいう。
- 二 所得割 所得により課する道府県民税をいう。
- 三 法人税割 次に掲げる法人の区分に応じ、それぞれ次に定める道府県民税をいう。

イ この法律の施行地に本店又は主たる事務所若しくは事業所を有する法人（以下この節において「内国法人」という。）
法人税額又は個別帰属法人税額を課税標準として課する道府県民税

ロ この法律の施行地に本店又は主たる事務所若しくは事業所を有しない法人（以下この節において「外国法人」という。）
次に掲げる法人税額の区分ごとに、当該法人税額を課税標準として課する道府県民税

(1) 法人税法第四百一条第一号イに掲げる国内源泉所得に対する法人税額

(2) 法人税法第四百一条第一号ロに掲げる国内源泉所得に対する法人税額

三の二 利子割 支払を受けるべき利子等の額により課する道府県民税をいう。

三の三 配当割 支払を受けるべき特定配当等の額により課する道府県民税をいう。

三の四 略

254 略

（地方消費税に関する用語の意義）

第七十二条の七十七 地方消費税について、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 事業者 個人事業者（事業を行う個人をいう。次条第二項において同じ。）及び法人をいう。

二 譲渡割 消費税法第四十五条第一項第四号に掲げる消費税額を課税標準として課する地方消費税をいう。

三 貨物割 消費税法第四十七条第一項第二号に掲げる課税標準額に対する消費税額又は同法第五十条第二項の規定により徴収すべき消費税額（消費税に係る延滞税の額を含まないものとする。）を課税標準として課する地方消費税をいう。

（地方消費税の市町村に対する交付）

第七十二条の百十五 道府県は、前条第一項に規定する合算額の二十二分の十に相当する額から第七十二条の百十三第一項の規定により国に支払った金額に相当する額を減額した額に、前条第一項の規定により他の道府県から支払を受けた金額に相当する額を加算し、同項の規定により他の道府県に支払った金額に相当する額を減額して得た合計額の二分の一に相当する額を、政令で

定めるところにより、当該道府県内の市町村（特別区を含む。以下この条及び次条において同じ。）に対し、官報で公示された最近の国勢調査の結果による各市町村の人口及び統計法第二条第四項に規定する基幹統計である事業所統計の最近に公表された結果による各市町村の従業者数に按分して交付するものとする。

2 道府県は、前条第一項に規定する合算額の二十二分の十二に相当する額に、同条第二項の規定により他の道府県から支払を受けた金額に相当する額を加算し、同項の規定により他の道府県に支払った金額に相当する額を減額して得た合計額の二分の一に相当する額を、政令で定めるところにより、当該道府県内の市町村に対し、前項の人口に按分して交付するものとする。

3 第一項の場合においては、市町村に対して交付すべき額の二分の一の額を同項の人口で、他の二分の一の額を同項の従業者数で按分するものとする。

（不動産取得税に関する用語の意義）

第七十三条 不動産取得税について、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 不動産 土地及び家屋を総称する。
- 二 土地 田、畑、宅地、塩田、鉱泉地、池沼、山林、牧場、原野その他の土地をいう。
- 三 家屋 住宅、店舗、工場、倉庫その他の建物をいう。
- 四 住宅 人の居住の用に供する家屋又は家屋のうち人の居住の用に供する部分で、政令で定めるものをいう。
- 五 価格 適正な時価をいう。
- 六 建築 家屋を新築し、増築し、又は改築することをいう。
- 七 増築 家屋の床面積又は体積を増加することをいう。
- 八 改築 家屋の壁、柱、床、はり、屋根、天井、基礎、昇降の設備その他家屋と一体となつて効用を果たす設備で政令で定めるものについて行われた取替え又は取付けで、その取替え又は取付けのための支出が資本的支出と認められるものをいう。

（用語の意義及び製造たばこの区分）

第七十四条 道府県たばこ税（以下この節において「たばこ税」という。）について、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 製造たばこ たばこ事業法（昭和五十九年法律第六十八号）第二条第三号に規定する製造たばこ（同法第三十八条第二項に規定する製造たばこ代用品を含む。）をいう。
- 二 特定販売業者 たばこ事業法第十四条第一項に規定する特定販売業者をいう。
- 三 卸売販売業者 たばこ事業法第九条第一項に規定する卸売販売業者をいう。
- 四 小売販売業者 たばこ事業法第九条第六項に規定する小売販売業者をいう。
- 五 小売販売業者の営業所 たばこ事業法第二十二条第一項に規定する営業所をいう。

2 略

（ゴルフ場利用税の納税義務者等）

第七十五条 ゴルフ場利用税は、ゴルフ場の利用に対し、利用の日ごとに定額によつて、当該ゴルフ場所在の道府県において、その利用者に課する。

第百三条 道府県は、当該道府県内のゴルフ場所在の市町村（特別区を含む。以下この条において同じ。）に対し、総務省令で定めるところにより、当該道府県に納入された当該市町村に所在するゴルフ場に係るゴルフ場利用税の額の十分の七に相当する額を交付するものとする。

（用語の意義）

第百四十四条 軽油引取税について、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 軽油 温度十五度において〇・八〇一七を超え、〇・八七六二に達するまでの比重を有する炭化水素油をいい、政令で定める規格の炭化水素油を含まないものとする。

二 元売業者 軽油を製造することを業とする者、軽油を輸入することを業とする者又は軽油を販売することを業とする者で、第四百四十四条の七第一項の規定により総務大臣の指定を受けている者をいう。

三 特約業者 元売業者との間に締結された販売契約に基づいて当該元売業者から継続的に軽油の供給を受け、これを販売することを業とする者で、第四百四十四条の九第一項の規定により道府県知事の指定を受けている者をいう。

2 軽油引取税が課される引取りが行われる前に軽油に炭化水素油以外のものを混和した場合には、その混和により生じたものを前項第一号の軽油とみなす。

(用語の意義及び製造たばこの区分)

第四百六十四条 市町村たばこ税(以下この節において「たばこ税」という。)について、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 製造たばこ たばこ事業法第二条第三号に規定する製造たばこ(同法第三十八条第二項に規定する製造たばこ代用品を含む。)をいう。

二 特定販売業者 たばこ事業法第十四条第一項に規定する特定販売業者をいう。

三 卸売販売業者 たばこ事業法第九条第一項に規定する卸売販売業者をいう。

四 小売販売業者 たばこ事業法第九条第六項に規定する小売販売業者をいう。

五 小売販売業者の営業所 たばこ事業法第二十二条第一項に規定する営業所をいう。

2 略

第四百八十五条の十三 市町村(特別区を含む。以下この項において同じ。)は、当該市町村に納付された当該年度のたばこ税(特別区たばこ税を含む。以下この項において同じ。)の額に相当する額が、当該年度の前々年度の全国のたばこ税の額の合計額に当該市町村のたばこ消費基礎人口(公表された最近の国勢調査の結果による当該市町村の二十歳以上の人口及び当該市町村以外の市町村に居住する者であつて当該市町村において従業し、又は当該市町村へ通学する者のうち二十歳以上のものの人口の合

計をいう。以下この条において同じ。）に二を乗じて得た数を全国のたばこ消費基礎人口の合計で除して得た割合を乗じて得た額（次項において「たばこ税に係る課税定額」という。）を超える場合には、当該超える部分に相当する額を、政令で定めるところにより、当該市町村を包括する道府県に対して当該年度の翌年度に交付するものとする。

2 たばこ消費基礎人口及びたばこ税に係る課税定額の算定に関し必要な事項は、総務省令で定める。

○ 道路法（昭和二十七年法律第百八十号）（抄）

（都道府県道の意義及びその路線の認定）

第七条 第三条第三号の都道府県道とは、地方的な幹線道路網を構成し、かつ、次の各号のいずれかに該当する道路で、都道府県知事が当該都道府県の区域内に存する部分につき、その路線を認定したものをいう。

一 市又は人口五千以上の町（以下これらを「主要地」という。）とこれらと密接な関係にある主要地、港湾法第二条第二項に規定する国際戦略港湾、国際拠点港湾、重要港湾若しくは地方港湾、漁港漁場整備法（昭和二十五年法律第百三十七号）第五条に規定する第二種漁港若しくは第三種漁港若しくは飛行場（以下これらを「主要港」という。）、鉄道若しくは軌道の主要な停車場若しくは停留場（以下これらを「主要停車場」という。）又は主要な観光地とを連絡する道路

二 主要港とこれと密接な関係にある主要停車場又は主要な観光地とを連絡する道路

三 主要停車場とこれと密接な関係にある主要な観光地とを連絡する道路

四 二以上の市町村を経由する幹線で、これらの市町村とその沿線地方に密接な関係がある主要地、主要港又は主要停車場とを連絡する道路

五 主要地、主要港、主要停車場又は主要な観光地とこれらと密接な関係にある高速自動車国道、国道又は前各号のいずれかに該当する都道府県道とを連絡する道路

六 前各号に掲げるもののほか、地方開発のため特に必要な道路

2 都道府県知事が前項の規定により路線を認定しようとする場合においては、あらかじめ当該都道府県の議会の議決を経なければ

ばならない。

3 第一項の規定により都道府県知事が認定しようとする路線が地方自治法（昭和二十二年法律第六十七号）第二百五十二条の十九第一項の市（以下「指定市」という。）の区域内に存する場合においては、都道府県知事は、当該指定市の長の意見を聴かなければならない。この場合において、当該指定市の長は、意見を提出しようとするときは、当該指定市の議会の議決を経なければならぬ。

4～8 略

○ **地方揮発油譲与税法（昭和三十年法律第百十三号）（抄）**

（地方揮発油譲与税）

第一条 地方揮発油譲与税は、地方揮発油税法（昭和三十年法律第百四号）の規定による地方揮発油税の収入額に相当する額とし、都道府県及び市町村（特別区を含む。以下同じ。）に対して譲与するものとする。

○ **航空機燃料譲与税法（昭和四十七年法律第十三号）（抄）**

（航空機燃料譲与税）

第一条 航空機燃料譲与税は、航空機燃料税法（昭和四十七年法律第七号）の規定による航空機燃料税の収入額の十三分の二に相当する額とし、空港関係市町村及び空港関係都道府県に対して譲与するものとする。

2 略